



まえがき

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 特任教授
河合 靖

本書は、科学研究費補助金 基盤研究(B) 一般「多層言語環境における第二言語話者像一トランスランゲージング志向の会話方略」（課題番号：19H01276，2019年度～2023年度）の研究成果報告書である。まえがきとして、この研究グループの歩みを述べる。

共同研究「多層言語環境研究」の発端は、2011年の公開シンポジウムであった。北海道大学の東京オフィスと札幌キャンパス遠友学舎で開催されたこのシンポジウムは、メディア・コミュニケーション研究院の研究成果を社会還元する意図を持つものであった。東京でのシンポジウムには、東京外国語大学（当時）の伊東祐郎先生、明治大学（当時）の尾関直子先生が、札幌でのシンポジウムには本大学院で学位を取得した立命館大学（当時）の廣森友人先生と愛媛大学（当時）の松本広幸先生が登壇され、これに私と今も同僚の小林由子氏が加わって、学習者の多様性をテーマに討論を行った。

したがって、当初は多層言語環境研究という枠組みで研究を意図したわけではなかった。私の専門は第二言語習得の個人差要因であり、ご登壇いただいた先生方も学習方略や動機づけが専門であった。ところが、部局の言語関連の研究者が共同研究をする方向で科研申請をするように大学の方針が出されてくる。何度か基盤 B で応募するが、共同研究をする想定で採用人事をしてきたわけでもなく、それぞれに研究テーマを持っている研究者を集めて研究計画を立てるのは簡単な話ではなかった。出しては落ちの状態を、しばらく落ち続けることになる。

そのうちに、また公開シンポジウムを企画する時期がやってきた。再びご登壇をお願いした伊東祐郎先生は、当時本務校で日本語教育スタンダードの作成に関わられていて、あわせてヨーロッパの CEFR の話をお話いただくことにした。伊東先生は、私がアラバマ大学の大学院にいたころに、TA で日本語を教えていたときの上司であった。同じ時期に同大学に在籍していた同窓生の萬美保氏が、その時は香港大学に勤めて日本語学科長をやっており、Can-do Statement の開発をしていた。シンポジウムは、CEFR と Can-do Statement をテーマに行うことにした。

このシンポジウムの企画をしている時期に科研申請もあって、複言語主義と香港を融合した申請書を作成した。これが通って、2015年度から3年間の科研費基盤 B が採択されることとなる。東アジアでヨーロッパのような複言語主義共同体を構築する可能性を検討する、多言語社会である香港から示唆を得る、という内容であった。これが、多層言語環境研究の出発となる。広東語の権威である現東京都立大学の飯田真紀先生が、当時同僚であったのも大きかったと感じる。

多層言語環境という言葉は、実は私の発案ではなかった。当時の学院長から、多言語とか複言語とか言うよりも、多層言語という用語を使って独自性を出すようにとアイデアをいただいた。多様な言語状況の重層性を理解する上で、今ではこれを使ってきて大変幸運

であったと感じている。

この研究の申請書では、日本の経済発展、国際的地位の保全・向上に資する目的であることが謳われていた。国策の言語政策に乗っかって書かれていたわけである。また、前提として、島国日本の日本人が持つ第二言語習得の苦手意識克服という考え方があった。一般的な日本人の英語学習に対するルサンチマンに訴えていたことになる。しかし、海外からの研究者を招いて国際シンポジウムを定期的に開くうちに、台湾の研究者に多く参加していただくようになり、その発表から、島国日本という認識が誤謬であり、日本は歴史的に多様な言語文化的状況があったことに気づいていく。第1シリーズの多層言語環境研究の科研成果報告書には、モノリンガルの母語話者を外国語教育の目標モデルとすることに対する疑念が述べられることになる。

こうした過程を経ているので、第2シリーズの多層言語環境研究である本科研の申請書は、第1シリーズと比較して、聞こえのよい国際化のための英米英語母語話者的な英語力育成には批判的な視点で書かれている。この研究では、バイリンガルの第二言語話者を外国語学習の目標モデルとすること、また、言語運用の実際の形としてトランスランゲージングを志向することを提言した。詳しくは、第1章「研究課題の概要」をご覧ください。その申請が、2019年度から5年間の科研費基盤B共同研究として採択された。コロナ禍のため、当初の計画を変更しなければならなくなったが、そのことにより、高度なバイリンガルのトランスランゲージングという新たな視点に目を向けることができた。この研究の成果は、以下、本報告書の本編に示すとおりである。本文部科学省科学研究費補助金による研究プロジェクト成果が、日本の多層言語環境化に私たちが立ち向かう一助となることを期待する。

令和6年3月

研究代表者 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 特任教授
河合 靖

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
2019年度～2023年度 科学研究費補助金 基盤研究（B）（一般）研究成果報告書

もくじ

まえがき

第1章 研究課題の概要.....	1
第2章 研究の進展.....	11
(1)2019年度.....	11
(2)2020年度.....	16
(3)2021年度.....	21
(4)2022年度.....	25
(5)2023年度.....	26
第3章 研究成果.....	33
(1)トランスリンガルな世界	
リテラシー教育におけるトランスリンガルな文学の意義 —Translingual Identity Text の実践を支える理論的枠組み—(佐野愛子).....	35
言文不一致言語の外国語教育 —日本語を母語とする香港広東語学習者を例に—(飯田真紀).....	55
多層言語環境における言語簡略化 —簡約日本語のディスコース計画—(大友瑠璃子).....	71
(2)トランスランゲージングの実際	
意思決定タスクにおける協働的対話の特徴 —社会文化理論の視点から—(酒井優子).....	119
高度バイリンガルのトランスランゲージングと 日本人英語学習者の反応(河合靖・山田智久・小林由子).....	139
(3)トランスランゲージングの教育移転	
多層言語環境における学びと学習者の認識 —認識の変容とトランスランゲージング—(三ツ木真実).....	181

外国語教育におけるマルチモーダルなコミュニケーションと AI の活用(杉江聡子)	197
第4章 国際会議・シンポジウム等の参加報告	223
(1) 第 1 回日本語プロフィシエンシー研究学会国際大会 (第 12 回 OPI 国際シンポジウム)	223
(2) International Society for Language Studies 2019 Conference.....	224
(3) 2023 年度国際学術大会「地域文化の理解と日本学研究ネットワーク形成 II」.....	225
あとがき.....	229
業績一覧.....	231

第1章 研究課題の概要

研究課題名 2019年度～2023年度 科学研究費補助金 基盤研究（B）（一般）
「多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略」

研究課題番号 19H01276

研究組織 研究代表者 河合 靖
(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 特任教授)

研究組織

研究代表者		
氏名	所属研究機関／部局／職	研究役割分担
河合 靖	北海道大学／大学院メディア・コミュニケーション研究院／特任教授	研究遂行の統括および国際シンポジウム企画実行. 成果報告書の作成.

研究分担者		
氏名	所属研究機関・部局・職	研究役割分担
大友 瑠璃子	北海道大学／大学院メディア・コミュニケーション研究院／准教授	多層言語環境社会の言語政策的考察（言語簡易化）
小林 由子	北海道大学／国際連携機構 国際教育研究センター／教授	多層言語環境社会の心理学的考察（言語使用意欲）
飯田 真紀	東京都立大学／人文科学研究科／教授	多層言語環境社会の理論言語学的考察（原文不一致言語）
佐野 愛子	立命館大学／文学部／教授	多層言語環境社会のバイリンガル教育的考察（トランスリンガルアイデンティティ）
酒井 優子	東海大学／国際文化学部／教授	多層言語環境社会の応用言語学的考察（教室内第二言語習得における母語の役割）
山田 智久	西南学院大学／外国語学部／教授	トランスランゲージングの教育移転（国際共修プログラム）
三ツ木 真実	小樽商科大学／言語センター／准教授	多層言語環境社会における学びの学習者論的考察（トランスランゲージング的態度）
杉江 聡子	札幌国際大学／人文学部／准教授	多層言語環境社会の教育工学的考察（AI利用の外国語学習）

研究経費

■ 交付決定額（配分額）

（単位：千円）

年 度	直接経費	間接経費	合 計
2019 年度	4,300	1,290	5,590
2020 年度	1,900	570	2,470
2021 年度	2,700	810	3,510
2022 年度	2,100	630	2,730
2023 年度	2,300	690	2,990
総 計	13,300	3,990	17,290

研究計画

以下、科研費申請時の申請書の内容に、採用後新型コロナウイルス感染拡大の影響などによる変更について書き加えながら、本研究の研究計画を説明する。

1 研究目的、研究方法など

（概要）世界的規模で人口移動が増加するにつれて、日本も多様な言語集団が短期・長期的に幾重にも存在する多層言語環境社会に突入している。そのような社会では、話し相手や目的・状況に応じて、自分の言語レパートリーから言語資源を選んで用いる複言語主義的な第二言語話者が求められる。しかし、日本の言語環境文脈でのそうした第二言語話者像が具体的に示されているわけではない。本研究では、日本における第二言語話者の文末表現、聞き手反応、意味交渉など会話方略のコード・スイッチングについて考察し、さらにそうした言語の混合使用を含む会話方略への評価を、評価者の属性の違いにより比較して、将来の多層言語環境化した日本社会における第二言語話者像がどのように変化するか示唆する。

多層言語環境研究

申請者は、2015～2017 年度科研費基盤研究(B)(一般)「東アジア圏の複言語主義共同体の構築—多言語社会香港からの示唆」(研究代表者河合靖, 課題番号 15H03221)を実施した。15 年前に母語話者評価研究を行った時から考えると、日本はさらに多層言語環境化が進んでいる。外国人人口が劇的に増加傾向にあることは、各種統計(法務省在留外国人統計, 総務省統計局国勢調査, 出入国管理統計表, 国土交通省観光庁統計情報・白書等)から明らかであるし、国立社会保障・人口問題研究所(2015)や内閣府高齢社会白書(2017)が予測する高度少子高齢化社会の到来により労働者不足がもたらされれば、外国人労働力によるその補てんが進行することは明白である。また、「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」(2016)で訪日外国人旅行者の増加目標が示され、短期在留者増加も今後さらに加速されるだろう。外国人在留者の増加は、国内の言語使用の多様化を意味する。日本の多層言語環境化は無視できない事実であり、多層言語環境研究の目的は多様社会に対応する人材の育成であった。

「多層言語環境」という用語の使用には、モノリンガル、バイリンガル、マルチリンガ

ルの住民が、さまざまな言語種あるいは熟達度の組み合わせで入り組んで住みながら接触する様子を際立たせる意図があった。そうした社会の代表はヨーロッパの複言語主義的な言語環境であり、そこでは、コミュニケーションの相手や目的、状況に応じて、自分の言語レパートリーから使用可能な言語資源を選んで用いる第二言語話者像が求められている。これは、第二言語学習の目標モデルが、モノリンガル母語話者からバイリンガル・マルチリンガル第二言語話者に変更されることを意味する。

多層言語環境研究科研においては、日本語及び香港の使用言語である広東語の文末表現の特徴から見る東アジア圏の言語的共通性や(飯田, 2018), 学校教育における言語政策の変遷(横山, 2017), 住民の多言語能力獲得に対する意欲の高さ(佐野, 2017), 学生間の言語交換・言語交流による日本人英語学習者の変容(河合・河合, 2018; 杉江, 2016; Sugie & Mitsugi, 2017)などが考察されて行ったが、ヨーロッパの複言語主義的な第二言語話者を日本において育成する道筋がこの研究により現実的なものとして見えたかと言えば、否と言うしかない。グローバル化に伴う日本の国際的な生き残り戦略における日本人の英語力の向上、つまり「英語が話せる日本人育成のための行動計画」(文部科学省, 2003)に沿う高度な英語熟達度を持った人材育成への示唆が、この科研共同研究の貢献と言える。つまり、英語学習者の到達目標モデルは、モノリンガル英語母語話者のままであったと言える。

研究課題の核心をなす学術的「問い」

多層言語環境研究は、次のような考え方を基にして発想されていた。日本語を単一言語として使う島国日本は、英語運用能力の獲得に不利な環境である。グローバル化する世界で日本が生き残るためには、この状況を打破する革新的英語教育が求められる。しかし、香港、台湾などの東アジアの研究者との交流から、日本が歴史的に単一言語使用地域であったという認識は誤謬であると気づかされた。明治後半から終戦までの半世紀の間、実際には日本は言語多様性に富んだ多層言語環境社会であった。朝鮮語や中国語、台湾の原住民諸語、あるいは南洋諸語の母語話者を「国内」に多数抱えていたし、北海道や沖縄にもアイヌ語や沖縄諸語の母語話者がまだ多く存在していた。(日本が単一言語国家でなかったことを示す例として、日本語と英語の混合した小笠原諸島言語があげられるが、その研究の権威である東京都立大学教授のダニエル・ロング氏を基調講演者として 2022 年 3 月に多層言語環境研究シンポジウムをオンラインで開催した。現在は、労働力不足から海外から労働力を補填する政策が進められているが、彼らとのコミュニケーションに簡易化された日本語を用いる施策がある。これに対する論考は、大友 (2024) として本報告書第 3 章に掲載されている。)

島国の言語環境が、日本人が第二言語習得を不得手とする理由だとする前提は疑わしい。日本人の英語下手だった理由は、単一言語使用を正当化しようとする精神作用ではなかったかという疑問が浮かんできた。そうした精神作用のもとでは、ヨーロッパ型の複言語主義的な第二言語話者像は理解されない。しかし、日本人が求める第二言語話者像を具体的に調べた研究は管見の限り知らないし、本音の第二言語話者像を顕在化させることも難しいだろう。現在の日本における第二言語話者像を具体的かつ実証的に掘り起こし、さらにその第二言語話者像の今後の変化を予測することは可能か。これが、本研究の核心をなす学術的な問いである。

本研究の目的および学術的独自性と創造性

本研究の目的

本研究は、次の二つの目的を持つ。

(1) 実際の会話事例を、談話分析や会話分析の手法を用いて考察することにより、文末表現、聞き手反応、意味交渉などの会話方略におけるコード・スイッチングを機能的に分類する。

(2) この分類に基づいて、会話方略のコード・スイッチングを操作した刺激会話ビデオを製作し、母語話者性に関わる属性の異なる評価者にインタビューして評価とその理由を記録し、分析する。

すでに述べたように、世界規模で越境する人口動態は必然であり、日本も例外ではない。多層言語環境は、程度の差こそあれ、世界中どこでも好むと好まざるとに関わらず見られることになる。異言語話者、多言語話者の人口構成比上の増加に伴って、モノリンガル社会を志向する第二言語話者像からバイリンガル社会を志向するそれへと変化すると予測する。その変化は、私たち個人々の第二言語話者の言語パフォーマンスに対する印象の評価に現れるだろう。またその違いは、モノリンガル話者かバイリンガル・マルチリンガル話者かなどの私たちの言語経験に関する属性に基づくはずである。なぜなら、多層言語環境的な言語経験は、バイリンガル社会志向の第二言語話者像をもたらすと予測されるからだ。現在混在しているであろう第二言語話者像を、第二言語話者のパフォーマンスに対する評価からあぶり出して記述し、これからの変化を予測することが本研究の目的である。

学術的独自性と創造性

これまで見てきたように、本研究の大きな特徴は日本語教育研究の母語話者評価研究と、英語教育研究における多層言語環境化に向けた人材育成研究の融合である。しかし、本研究が根幹とするのは、両者に共通する第二言語話者の目標モデルをモノリンガル母語話者とする暗黙の前提への疑義である。第二言語話者の目標モデルを第二言語話者に設定する方向へ向けた基礎研究。これが、本研究の独自性を表す特徴的な性格である。

母語話者であるためには、母語として言語習得する時期にその言語に触れる必要がある。母語話者としてある言語を習得したければ、幼少期に目標言語環境に移動すればよい。その時期を過ぎてから第二言語習得を行うのであれば、その目標モデルを母語話者に置くことには無理がある。第二言語話者の目標モデルは第二言語話者しかありえない。しかし、それを認めることは、新たな問題を引き起こす。一つは母語話者の存在意義が損なわれ、その言語そのものが変質するのではないかという懸念であり、もう一つは目標モデルとしての第二言語話者をどのような人に設定するか具体的に示すことが困難なことである。

一つ目の問題については、母語話者集団が失われたり、母語話者に第二言語話者モデルの言語使用を強制したりすることは起こりえないので、そのような心配は無用と考える。二つ目の問題については、本研究では、談話レベルでの会話方略のうち、文末表現、聞き手反応、意味交渉などにおけるコード・スイッチングに焦点を絞って、それらを操作しながらコード・スイッチングする具体的な第二言語話者像を作成する。これにより、目標とする第二言語話者像を可視化する道が開けるだろう。これが、本研究の創造性と言える。

本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

CEFR を利用した教育手法、さらには、認定試験などの動きが加速している。しかしながら、日本では、4 技能に対しての研究は進んでいるが、第2言語の能力として必要とされる「言葉のやりとり(interaction)」や「仲介活動(mediation)」についての研究は進んでいない。また、外国語学習では、言語の機能の中で、「内容を伝達する(ideational function)」や「テキストの合理性を整える(textual function)」という外国語学習の機能が重視されがちであるが、「人間関係を調整する(interpersonal function)」という機能も実際の「言葉のやりとり」を行う時に大きな意味を持つとされる(Halliday, 1973, 2007)。

本研究では、第二言語話者のパフォーマンスの評価に影響を与える会話方略の項目として、次のようなものに注目する。一つ目は、日本語であれば、か、ね、よ、ねえ、などの終助詞やそれに相当する語句、英語であれば right? や付加疑問などを指す文末表現と呼ばれる項目。二つ目は、ええ、はい、なるほど、本当ですか、uh – huh, I see, Is that so, Really?などの相槌や、ええと、あのう、まあ、um, well, I mean, let's see などのフィラーを含む聞き手反応と呼ばれる言語項目。三つ目は、言いたいことが言えない、言われたことがわからない場合に、やり取りを繰り返して問題解決を図る意味交渉である。

本研究では、第1フェイズとして、第二言語話者の会話におけるこれらの会話方略の使用状況を、先行研究を参考にしながら考察し、そこに見られるコード・スイッチングの特徴を分類する。データは、留学生と日本人学生がタンデム・ラーニングを行っている様子を録画して採取する。タンデム・ラーニングは、母語の異なる学習者がペアを作って、時間設定しながら言語を代えてコミュニケーションを行う自律学習形態である。たとえば、アメリカ人留学生と日本人英語学習者がペアの場合、英語で30分、日本語で30分会話すると、母語話者と非母語話者の英語会話、母語話者と非母語話者の日本語会話のデータが得られる。中国人留学生と日本人留学生がペアになった場合は、非母語話者同士の英語会話と母語話者と非母語話者の日本語会話を得られることになる。データを書き起こして、コード・スイッチングの起こっている文末表現、相槌やフィラー、意味交渉を中心に分析し、分類を試みる。(新型コロナウイルス感染拡大の時期が、このデータ収集の時期と重なったために、対面でのタンデム・ラーニングによるデータ収集はできなかった。このため、日本語と英語の両言語において母語話者並みの運用能力を持つ高度なバイリンガルの対談動画を対象として、二言語併用の様子を分析し、分類を行った。なお、高度なバイリンガルどうしによる対話の場合、事前に予想した文末表現、相槌、意味交渉での言語の切替は少なかったため、これ以外の二言語併用についても考察の対象とした。)

第1フェイズで行った分析に基づいて、第2フェイズでは、文末表現、相槌やフィラー、意味交渉のコード・スイッチングを操作しながら評価者に見せる刺激会話ビデオを製作する。これを見せながら評価者にインタビューを行い、その評価や理由を記録する。結果は、評価者の属性に注目して量的に比較した後、理由をインタビューのデータを質的に分析して考察する。モノリンガルの評価者よりバイリンガルの評価者の方が **translanguaging** 的な言語使用を志向すると予測する。(刺激会話ビデオについても、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、実写での動画撮影は断念した。代替案として、イラストレーションに音声を付ける形で動画を作成し、刺激ビデオとした。また、データは質問紙調査とし、インタビューによるデータ収集は行わなかった。回答者にバイリンガルが多く得られなかった

ので、属性については、英語使用に対する自己肯定感や伝統型英語使用観の高低による比較を行った。二言語併用に対する英語学習者の認識に対する考察としては、三ツ木 (2024) = 本報告書第 3 章掲載でも扱われている。)

会話方略には本研究で取り上げた項目のほか、非言語行動や音声面のコントロール(谷口, 1989)、会話を展開する技能や場面の条件(場所、話題、人間関係、立場、時間、状況)にあった適切な言語運用を行う判断力(岡崎,1989)などがあげられてきている。これらの項目の重要性を否定するものではないが、研究グループのこれまでの研究対象と興味の方向性から、文末表現、聞き手反応、意味交渉の 3 つを今回の考察対象に含めた。(上記の通り、これ以外の二言語併用についても考察の対象とした。)

また、先行研究の有無による比較のしやすさから、英語の会話データから分析し、ついで日本語を比較対象としてまず行う。研究グループのメンバーに中国語話者を含むので、中国語会話の分析も可能であるが、日本人大学生の中国語話者がそれほど数多く見込めない事情があり、十分な量のデータが得られた場合という条件付きで考察対象に含めるものとする。(日本語と英語の両言語で行われる動画を分析した。また、日本人英語学習者の教室内言語活動における二言語併用も、酒井(2024) = 本報告書第 3 章掲載で分析している。)

本研究の着想に至った経緯など

(1)本研究の着想に至った経緯と準備状況

着想に至った経緯

本研究の着想は、前述の科研：基盤研究(B)で実施された国際シンポジウムでの、高雄科技大学(台湾)の黄愛玲氏・陳玫君氏による招待発表「台湾の言語政策現状と社会認識—語彙「国家言語」を中心に—」から得ている。台湾は、下関条約(1895)により日本に割譲されたので、終戦の 1945 年まで 50 年もの間日本の統治下にあったことになる。その後、日露戦争後の北海道が舞台となっているコミック「ゴールデンカムイ」で、日本語の通じないアイヌの高齢者が、当時まだアイヌ人口の 3 分の 1 いたという記述が私の目を引いた。実際には 50 年に渡って多層言語環境にあったにも関わらず、日本人は日本語モノリンガルを貫いたことになる。島国日本に住む日本人の英語習得に対するルサンチマンという「多層言語環境研究」の前提的認識は誤謬であることに気づかされた。これが、本研究の着想の出発点である。(台湾と日本の関係に関する視点では、台湾にルーツを持つ作家・温又柔氏を招いた学習会を開催した。さらに二言語併用のテキストを海外にルーツを持つ子供たちのリテラシー教育に用いる提言が、佐野(2024) = 本報告書第 3 章掲載で行われている。また、広東語が言文不一致言語であることを取り上げた飯田(2024) = 同上も、東アジア圏の近代の言語状況に関する関心の延長線上にあると言える。)

準備状況

(本研究の申請時には、研究代表者河合靖が統括し、研究分担者 5 名、研究協力者 2 名を置く予定であった。採択後、研究協力者 2 名が研究分担者となり、さらに研究分担者 2 名が加わった。しかし、1 年経過時の 2020 年度に研究分担者 1 名が校務多忙となり辞退したため、研究代表者 1 名と研究分担者 8 名の組織となった。また、分担者の所属の変更があったため、ここでは 2023 年度の組織をその時点の所属で記述する。)

研究代表者：河合靖（北海道大学）

研究分担者：大友瑠璃子（北海道大学）、小林由子（北海道大学）、飯田真紀（東京都立大学）、杉江聡子（札幌国際大学）、山田智久（西南学院大学）、三ツ木真実（小樽商科大学）、酒井優子（東海大学）、佐野愛子（立命館大学）

申請グループのメンバーは、いずれも過去に互いに共同研究の実績がある。また、申請の前々年度まで3年間多層言語環境をテーマに科研費研究を行い、終了後も共同研究を継続している。既存の施設基盤とノウハウを利用し、本科研費の採択を受けた後すぐに研究を開始できる。

(2)関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

日本人の第二言語話者像に関する先行研究には、日本語教育における母語話者評価研究（小池, 2000, 2003; 小林, 2000; 松崎, 2003; 柳町, 2000; 渡部, 2003, 2004）、および日本語会話方略教育の研究（伊藤, 1993; 岡崎, 1987; 中井・大場・土井, 2004）があった。また、英語教育の言語混合使用に関する先行研究としては、英語圏における第二言語話者のコード・スイッチングの研究や（Auer, 1998; Bhatia & Ritchie, 2004; Clyne, 2003; Gal, 1988; Giles & Powesland, 1997; Heller, 1988; Myers-Scotton, 1993; Romaine, 1989; Su, 2009）、日本の英語教育におけるコード・スイッチングの研究（Fotos, 1995, 2001; 酒井, 2017; 田崎, 2017; Yokoyama, 2014）も存在する。しかし、日本で英語の第二言語パフォーマンスを、英語母語話者と日本人の英語第二言語話者の両方の視点からとらえる研究は本研究が嚆矢と言える。

話し相手の母語話者性による異なる会話方略の選択という発想は、日本語教育の方が先行して来たが、英語教育でも言語の切り替えを肯定的に捉える *translanguaging* の概念が登場し（García, 2009; García & Wei, 2014）、CEFR を日本の英語教育に取り入れる試み（岡, 2008; 小池, 2008, Negishi & Tono, 2016; 寺内, 2011）や、ヨーロッパ型の複言語主義を取るべきという主張（金田一・堺・倉館, 2007; 鳥飼他, 2017; 拝田, 2011, 2012）もある。

（英語以外の外国語教育について多層言語環境化に対応する教育が求められるが、AIを使った中国語教育についての論考は、杉江（2024）として本報告書第3章に掲載されている。）だが、第二言語話者に具体的な日本人英語話者のモデルを探る研究は、管見の限り存在しない。

応募者の研究遂行能力及び研究環境

本研究では、研究代表者河合が本科研費研究を統括し、専用ウェブサイトを設定して研究グループの連絡と成果の公開を行う。各分担者の専門分野に沿って以下の役割分担を行う。横山・酒井：会話データの談話分析。飯田：分析結果の言語理論的考察。山田：データ収集及び評価データのビリーフの視点からの分析。杉江：評価データ収集と質的分析。佐野：調査結果のバイリガル研究・*translanguaging* の視点からの考察。（申請書提出の時点では、以上のように考えていた。新型コロナウイルス感染拡大の影響で必ずしも予定通りではなかったが、本報告書に成果を示した通り、さらに専門性が活かされる形で、多層言語環境社会に向け

てトランスランゲージングを外国語教育に活用する提言が含まれた論考となっている。このことにより、本研究がより意義深くなり、その社会還元に貢献している。)

(1)これまでの研究活動

河合、横山（採択後 1 年経過して校務多忙につき分担者を辞退）、飯田、杉江、山田、佐野は、2015～2017 科研:基盤研究 (B) (一般)「東アジア圏の複言語主義共同体の構築—多言語社会香港からの示唆」(課題番号 15H03221)の共同研究者であった。札幌や香港で年 1, 2 回国際シンポジウムを開催。研究成果報告書 (2017) は冊子体のほか科研ウェブサイトで見ることができる。 (<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hkp48/?p=714>) 後続の科研申請が不採択だったが、研究は継続し、2018 年度も国際シンポジウムを実施する。 (<http://translanguaging.sakura.ne.jp/hkp48/?cat=12>)

(申請書では、以下、研究代表者・研究分担者 (2 名は申請時に研究協力者) の研究能力を示す説明が続く。本成果報告書の執筆者の紹介を兼ねて、ここに掲載する。)

河合と横山 (1 年経過時に分担者を辞退) は JACET で理事 (支部長)、Selected Papers 編集長等を経験し、佐野、酒井と CCR (Classroom-Centered Research) 研究会で共同研究を行った。1990 年代の JACET 研究会活動開始時に北海道支部の西堀・森永・高井元支部長らが設立した研究会で、2000 年以降我々がタスクを対象に研究した。業績は、河合・平田・新井・横山・大場 (2002) 「アクションリサーチのためのタスク分析」Hokkaido JACET Journal (1), 43-54, Shimura, A., Sano, A., Sakai, Y., Yokoyama, Y., & Kawai, Y. (2015). Combining MOLT to COLT schemes in assessing instructional events, Research Bulletin of English Teaching (12), 1-25. 等。

河合靖は、アラバマ大学で Rebecca Oxford に師事して M.A., Ph.D.を取得し、英語学習の学習者要因や自律学習を主な研究分野としてきた。著書に Griffiths, C. (Ed.), (2008). Lessons from good language learners, Cambridge University Press (共著)、小嶋・尾関・廣森 (編著), (2010) 『成長する英語学習者』大修館書店 (共著) 等がある。Griffiths, C.他 8 名 (Kawai, Y.は 3 番目著者)(2014), Focus on context: Narratives from East Asia, System (43), 50-63.(共著) では、東アジア圏の英語教育者のナラティブをグラウンデッド・セオリー・アプローチで分析して共通の特徴を抽出している。東アジア圏に興味を向け多層言語環境研究を構想する契機になった。

飯田真紀は、広東語の文末助詞の談話機能を研究対象とする言語学者である。東京外国語大学で修士、東京大学で博士を取得した後、北海道大学の所属となり、広東語、台湾語、日本語の対照分析を行う研究で数多くの科研費採択を得て研究を続け業績を重ねている。最新の論文に、Iida, M., (2018) Sentence final particles in Cantonese and Japanese from a cross-linguistic perspective, 『メディア・コミュニケーション研究』71, 65-93., 近刊の著書に、飯田(2019 予定)『言語横断的視点から見た広東語の文末助詞』ひつじ書房がある。また、広東語入門の業績も多く、飯田 (2010) 「ニューエクスプレス 広東語」白水社の出版、NHK テレビ「アジア語楽紀行～旅する広東語～」(2006)日本放送協会の番組監修をしている。

山田智久は、ロンドン大学で M.A.を取得。北海道大学で PAC 分析を用いたビリーフの研究で博士を取得。論文に、山田(2014)「教師のビリーフの変化要因についての考察：二

名の日本語教師への PAC 分析調査結果の比較から」日本語教育 (157), 32-46.等がある。北海道大学新渡戸カレッジ担当を兼任しており、留学生と日本人学生が協学する多文化交流授業を担当。会話データの研究対象者はこの授業参加者を予定している。(本科研では、新型コロナウイルス感染拡大により、別の二言語併用の会話を対象とした) ピリーフ研究者としての顔のほか、ICT の専門家としても著名で、著書に山田 (2017) 「ICT の活用 第2版 (日本語教師のための TIPS 77)」くろしお出版がある。

杉江聡子は北海道大学で遠隔交流を織り込んだインストラクショナルデザインの研究により修士、博士を取得した。ICT を活用した中国語教育を専門としており、近年は多層言語環境社会の進展に対応できる観光人材育成をテーマにしている。質的研究法の高度化にも興味を持ち、論文に、杉江(2016)「日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究」『中国語教育』(15), 105-123., 杉江・三ツ木(2015)「遠隔交流が創出する学びの経験とその価値：中国語学習における異文化体験の質的分析」『e-Learning 教育研究』(10), 1-13. 等がある。

研究協力者(採択後分担者に変更)・酒井優子, 佐野愛子は、ともに博士課程院生として博士論文を執筆中である。酒井は南イリノイ大学で SLA の分野で M.A. を取得後、日本にもどって高校教員をしながら日本人高校生英語学習者のコード・スイッチングを談話分析してきた。現在は東海大学(札幌キャンパス)勤務。論文に、Sakai, Y., (2017). The Use of L1 as a Positive Language Resource: As an Aid to Develop Critical Thinking Skills, 『東海大学国際文化学部紀要』9, 17-28.等がある。

佐野はトロント大学で Jim Cummins, Nina Spada らのもとでバイリンガル研究を学び、中島和子の指導によりバイリンガル児童のライティング研究で M.A. を取得。日本にもどって高校教員をしながら研究活動を続け、現在は北海道文教大学(その後札幌国際大学を経て立命館大学に転出)に職を得て日本人英語学習者の translanguaging による事前準備活動の効果の研究テーマとしている。論文は、Sano, A (2018). The effects of translanguaging in discussion as a pre-writing activity for writing in a second language, ARELE, 29. 193-208.等多数。

横山, 河合は年齢が高く、5年間の研究期間内に退職する可能性があるが、研究協力者2名がいるので、すみやかな研究分担者の補充が可能である。(実際に、横山に代わり、酒井・佐野が分担者となった。また、代表者の本務校から小林・大友の2名が加わった。小林・大友の研究活動について、以下に付け加える。)

小林由子は、北海道大学文学研究科修士課程行動科学専攻で修士号を取得した後、同大学留学生センターで日本語教育に従事。改組で現在は高等教育推進機構国際教育研究部所属、教授。近著では分担執筆で、小林(2023)「多様性を資源とする批判的思考の育成」、青木・鄭(編著)『国際共修授業 多様性を育む大学教育のプラン』明石書店, pp.83-109 があるほか、論文も多数。日本語教育学会の『日本語教育』の編集委員のほか、学会誌委員会委員、審査・運営協力委員を歴任している。

大友瑠璃子は、オーストラリア国立大学で修士、香港大学で博士を取得後、北海道大学に採用。現在准教授。著書に Otomo, R. (2023). Linking Language, Trade and Migration: Economic Partnership Agreements as Language Policy in Japan. Springer Cham., 分担執筆で Otomo, R. (2020). The policy and institutional discourse of communication

ability: The case of (migrant) eldercare workers in Japan. In Kellie Gonçalves & Hellen Kelly-Holmes (Eds.), *Language, Global Mobilities, Blue-Collar Workers and Blue-collar Workplaces* (pp. 147-163). London: Routledge. があるほか、論文も多数.

申請書ではこの後、研究環境、および人権の保護及び法令等の遵守への対応についての説明があるが、ここでは割愛する.

参考文献

次のサイトを参照されたい。

<http://translanguaging.sakura.ne.jp/3tken/wp-content/uploads/2024/03/reference.pdf>

第2章 研究の進展

(1) 2019年度

● 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義 (Multi-layered Language Society and Plurilingualism in Asia)」

2019年11月3日、北海道大学学術交流会館で開催された。台湾及び国内の研究者を招き、ラウンドテーブル（研究発表）とパネルディスカッションが行われた。参加者の出身国は、日本と台湾のほか、中国と韓国であった。海外2大学、国内12大学、計14大学からの参加があった。

国際シンポジウム 2019
2019 Symposium

アジア多層言語社会と複言語主義

Multi-layered Language Society and Plurilingualism in Asia

11月3日(日) 10:00 ~ 18:30 Sunday, November 3rd 10:00-18:30
 北海道大学学術交流会館 Hokkaido University Conference Hall

第一部 Session1

Round Table

呉怡婷 WU Yi ping (高雄科大・招待発表) From Problem-based Learning to Design Thinking
 三ツ木実美 MITSUGI Makoto (福井大) English Learning in a Multilayered Linguistic Environment and Development of the L2 Motivational Self-System
 佐野愛子 SANO Aiko (札幌国大) Translanguaging: its theoretical evolution and possible applications to language teaching in Japan
 横山吉樹 YOKOYAMA Yoshiki (筑波大) How is Translanguaging Assessed and Measured?
 壺井優子 SAKAI Yuko (京大) Learners' Use of First Language in Small Group Discussion in a Japanese EFL Class
 陳卓玲 TAM Chui Ling (北大・院) What will Happen when Students Conduct Tandem Learning?
 李麗 LEE Bong (北海道科大) ポライトネスと韓国語教育
 杉江聡子 SUGIE Satoko (北大) AIを活用した多言語コミュニケーションの質的分析
 中井優 NAKAI Suguru (北大・院生) 日本人英語学習者が英会話の聞き手を模倣したときに何に気付くか
 飯田真紀 IIDA Maki (龍谷大) 広東語文末助詞“嘸”(tim1)の発語行為用法の獲得
 佐藤淳子 SATO Junko (北大・院) Peer Learningにおける内省
 山田智久 YAMADA Tomohisa (北大) タンデム学習において学生は何に注目しているのか
 片山圭日 KATAYAMA Tamami (熊本大) 母語の音素配列の生起制約が第二言語学習者の母音知識に与える影響
 中道有美 MAKABUCHI Yumi (北大) Peer Review による気づきとライティングに与える影響への考察
 後月倫 AKIZUKI Tomo (北大・院生) TDEK の意義はどのように捉えられているのか
 馮麗娟 FENG Hui-Hsien (高雄科大・招待発表) Taking EFL Students' Writing Process into Account for Feedback Provision
 大友麗那子 OTOMO Ruriko (北大) Discourse of "Easy Japanese"
 河合皓 KAWAI Yasushi (北大) Making Sense by Switching Codes in Tandem Learning



第二部 Session2

Panel Discussion

西山教行 NISHIYAMA Noriyuki (京大)
 複言語主義のアプローチによるフランス語教育
 程遠巍 CHENG Yuan wei (孫逸科学大)
 中華圏におけるCEFRの利用と課題について
 鄭惠先 JUNG Hye seon (北大)
 大学教育における独自の「日本語スタンダード」の開発

お問い合わせ contact: 河合皓 KAWAI Yasushi (ykawai@imc.hokudai.ac.jp)

主催: 基礎研究 (B)19H01276 「多層言語環境における第二言語習得—トランスランゲージング志向の会話方略」(代表: 河合皓)
 Grant-in-Aid for Scientific Research (B) 19H01276 * L2 Speaker Image in Multi-layered Language Environment: Translanguage-oriented Speaking Strategies

プログラム

日時：2019年11月3日（日）10:30～18:30

会場：北海道大学学術交流会館（第1会議室・第2会議室・第3会議）

10:30～10:35 開会の挨拶（河合靖，北海道大学）

第1部 ラウンドテーブル 10:40～15:20（発表20分，質疑10分；指定討論者発表15分，質疑5分）

	第1会議室（英語テーブル） 司会：佐野愛子	第2会議室（日本語テーブル） 司会：山田智久	第3会議室（日本語・英語テーブル） 司会：河合靖
10:40-11:10	呉怡萍（国立高雄科技大学） ※招待発表	李鳳（北海商科大学）	片山圭巳（熊本大学）
11:10-11:40	三ツ木真実（小樽商科大学）	杉江聡子（北海道大学）	中道有美（北海道大学）
11:40-12:10	佐野愛子（札幌国際大学）	中井俊（北海道大学院生）	秋月倫（北海道大学院生）
12:10-12:30	指定討論者：藤井聡美（北海道大学）	指定討論者：金銀珠（北海道情報大学）	指定討論者：萬美保（元香港大学）
12:30-14:00	昼 食		
14:00-14:30	横山吉樹（北海道教育大学）	飯田真紀（首都大学東京）	馮蕙嫻（国立高雄科技大学）※招待発表
14:30-15:00	酒井優子（東海大学）	佐藤淳子（北海道大学院生）	大友瑠璃子（北海道大学）
15:00-15:30	譚翠玲（北海道大学院生）	山田智久（北海道大学）	河合靖（北海道大学）
15:30-15:50	指定討論者：LIN, Chu-Hui Ivy（小樽商科大学）	指定討論者：佐藤梓（神奈川大学）	指定討論者：中津川雅宜（小樽商科大学）

第2部 パネルディスカッション「ヨーロッパ複言語主義の言語教育はアジアに何をもたらしているか」第1会議室 16:15-18:25

司会：河合靖（北海道大学）

講師：西山教行（京都大学）「複言語主義のアプローチによるフランス語教育」

講師：遠巍程（流通科学大学）「中華圏におけるCEFRの受容」

講師：鄭惠先（北海道大学）「日本におけるCEFRの受容」

18:25-18:30 閉会の挨拶

研究代表者・分担者の発表要旨

三ツ木真実（小樽商科大学）

Title: English Learning in a Multilayered Linguistic Environment and Development of the L2 Motivational Self-System

Abstract: The purpose of this presentation is to explore how one Japanese

English learner developed and transformed his L2 motivational self-system (L2MSS) (Dörnyei, 2005) through English learning in a multilayered linguistic environment. L2MSS is one of the recent approaches to L2 motivational research and is a concept to capture motivation from three perspectives: ideal L2 self, ought-to L2 self, and L2 learning experience. To analyze learner's development of L2MSS, the narrative data collected through semi-structured interviews was analyzed qualitatively by means of the Trajectory Equifinality Approach (TEA): a cultural psychology theory that describes transformation of the individual beliefs and values embedded in the human development process (Sato, Yasuda, Kanzaki & Valsiner, 2014).

杉江聡子 (北海道大学)

題目: AI を活用した多言語コミュニケーションの質的分析 ELAN を用いた解析を事例として

要旨: 北海道のインバウンドの勢いは継続しており、中華圏からの訪日観光客は年々増加している。しかし、観光産業における中国語人材育成が積極的に行われているとは言い難く、留学生アルバイトや卒業者を雇用して現場のニーズに対応する体制を整備する傾向にある。外国語学習を通じて日本人に母語話者並みの言語運用技能を習得させるには多大なコストがかかるため、AI (自動音声翻訳機) を活用した通訳・翻訳の実用化が進んでいる。本研究では、観光接遇場面で外国人観光客と日本人従業員が AI を用いてコミュニケーションを行う際の「うまい使い方」、すなわち、コミュニケーションの失敗を最小限に抑え、失敗を克服するための方略を明らかにすることを目的として、インタラクション分析を行った。本発表では、ELAN を用いた分析のプロセスを詳述し、インタラクション分析の内容の解釈について報告する。



佐野愛子 (札幌国際大学)

Title: Translanguaging: Its theoretical evolution and possible applications to language teaching in Japan

Abstract: Since Baker (2001) introduced the concept of “translanguaging” as a translation of a Welsh pedagogical approach, it has garnered much attention from applied linguists, especially those interested in bilingual education. Despite its recent popularity in academic arenas, there appears to be some confusion and ambiguity about its concept, in part because there are many similar terms and concepts, with code switching being the most notable one. This presentation aims

at clarifying the evolution of translanguaging as a concept, as well as discussing the current theoretical challenges it faces, and its relevance in language teaching in Japanese contexts.

横山吉樹（北海道教育大学）

Title: How is translanguaging assessed and measured?

Abstract: I will discuss how code-switching is assessed from a lens of translanguaging. Emergent bilinguals including second language learners sometimes use code-switching, which has some significance in discourse. However, some young bilinguals is believed to employ unmarked code switching, which is a norm for them especially when they are talking to their friends. I will then discuss what makes distinct and different these types of code-switching, although they are sometimes claimed as translanguaging.

飯田真紀（首都大学東京）

題目：広東語文末助詞“添”(tim1)の発話行為用法の獲得

要旨：動詞“添”「追加する」に由来する広東語の文末助詞“添”は、いくつかの異なる用法を持つとされる。大まかには以下のような「通増，増量」（例(1)）及び「驚き，想定外」（例(2)）を表す用法とに分けられてきた。

(1)佢唔止識唱歌，仲識跳舞添！

（彼は歌を歌えるだけでなく，ダンスまでできるのだ！）（陳穎琪 2018）

(2)落雨添！

（（しまった）雨だ！）（陳穎琪 2018）

先行研究にはこうした“添”の多義性を，Sweetser1990 に倣い，内容(content)領域から認識(epistemic)領域への意味拡張と説明するものもある。

しかしながら，（発表者自身の研究を除くと，）先行研究では，発話行為(speech-act)領域への拡張は言及されていない。

本発表では，以下のような“添”を発話行為領域における用法と見なし，上記の用法との異同及び意味拡張の契機を探る。

(3)因住添呀！（気をつけるんだよ！）

併せて，他の文末助詞に見られる発話行為用法の獲得についても触れる。

酒井優子（東海大学）

Title: Learners' use of first language in small group discussion in a Japanese EFL class: A Sociocultural Perspective

Abstract: This study investigates the use of first language (L1) by Japanese high school learners of English while engaging in small group discussions. The study used

a sociocultural framework to determine the functions served by the learners' L1 in their L2 learning. Analysis of learners' spoken data and interview with them revealed that learners of differing levels of proficiency used L1 in their social speech to talk about language and task, and in their interpersonal relations. L1 private speech was also found to function beneficially for learners in their cognitive process when faced with difficult tasks and assisted not only for less proficient learners but also for advanced learners. The study further indicated that the learners' language choice was more flexible depending upon the group members' personalities and attitudes towards the L1 use as well as any roles defined for use within a collaborative interaction. The findings affirm the sociocultural perspective of language learning and suggest that learners' L1 should be considered as a beneficial resource if it encourages more participation and collaboration leading to L2 learning.

大友瑠璃子（北海道大学）

Title: Discourse of “Easy Japanese”: A preliminary language policy study

Abstract: This paper focuses on a series of academic dialogues and debates revolved around the recent Yasashii Nihongo (literally “Easy Japanese”) movement and analyzes the academic discourse from the perspective of

language policy. By taking the academic publications (mainly scholarly journals and books) as a primary dataset, I examine what ideas about language have been represented, promoted and circulated in the promotion of Yasashii Nihongo, while ignoring/denouncing other language-related beliefs. By presenting preliminary findings, I explore how Japanese language experts, particularly advocates of Yasashii Nihongo, come to establish their influences on the current Japanese language policy landscape.



山田智久（北海道大学）

題目: タンデム学習において学生は何に着目していたのかー日英バイリンガルクラスでの実践からー

要旨: 本研究は、北海道大学現代日本学プログラムで学ぶ留学生と英語を学ぶ日本人学生とで行った共同クラスについての実践報告である。本稿の発表者は、留学生の日本語運用能力の向上及び学内の国際交流活性化を目指し、2018年10月から2019年2月までタンデム学習の授業実践を行った。留学生は英語を母語もしくはネイティブに近いレベ

ル (CEFR の C1~2) で運用できるもので、対する日本人学生は、純粋に英語が好きな学生に集まってもらった。主に、ESS サークル、HEDS (Hokkaido English Debate Society) からの学生が多かった。履修者内訳は、留学生は 17 名、日本人学生は初回授業時 20 名であったが、授業後半に差し掛かると日本人学生は半減した。本発表では、当該授業を履修した学生への聞き取り調査から、「何におもしろさを感じていたのか」、「何が障壁となっていたのか」について報告する。



河合靖 (北海道大学)

Title: Making Sense by Switching Codes in Tandem Learning

Abstract: This presentation discusses the difference between translanguaging and code-switching by examining a negotiation of meaning in tandem learning example. Li (2018) contrasts these two language uses by saying “code-switching refers to the alternation between languages in a specific communicative episode,” while translanguaging “is a process of meaning- and sense-making.” A Japanese learner of English and a Swedish learner of Japanese conducted a tandem learning session. I will focus on the Japanese tandem learning session to see how they co-constructed meaning by switching languages to successfully escape the communication breakdown and understand each other.

(2) 2020年度

● 2020年第1回の例会(9月27日, オンライン)を開催。

講演: 「言語学習経験史と学習観—自律学習に焦点をあてて—」

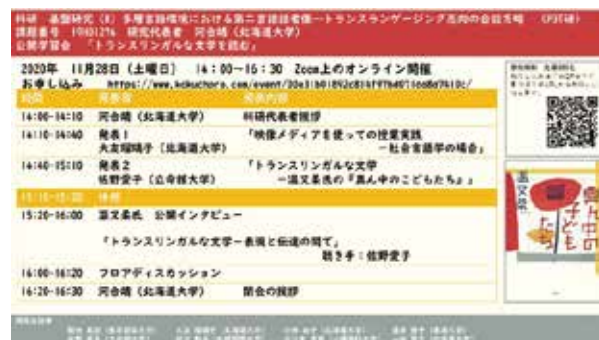
講師: 河合靖 (北海道大学)

● 2020年第2回例会として、多層言語環境研究オンライン公開学習会「トランスリンガルな文学を読む」(11月28日, オンライン)を開催。

司会: 佐野愛子

温又柔氏を迎え、発表2編および温又柔氏への公開インタビューを実施した。

温又柔氏は、芥川賞候補作「真ん中の子どもたち」の著者。「好去好来歌」でデ



ビューしてすばる文学賞佳作を受賞。『台湾生まれ 日本語育ち』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。

● 国際シンポジウム「多様性と言語 (Diversity and Language)」

2021年2月21日、オンラインで開催された。レベッカ・L・オックスフォード教授による基調講演「平和構築と言語教育の融合」の後、台湾及び国内の研究者による英語と日本語の言語別ラウンドテーブル(研究発表)を実施した。発表者の出身国は、日本と台湾のほか、中国、アメリカ合衆国、ロシアであった。海外4大学、国内8大学、計12大学からの参加があった。

Multi-layered Language Environment Studies International Symposium (Online)
多層言語環境研究国際シンポジウム (オンライン開催)

多様性と言語 (Diversity and Language)

2021年2月21日 (日) (日本時間)
February 21, 2021 (Sunday), Japan Time.



講演 (Lecture) (10:00~12:00)



レベッカ・L・オックスフォード (メリーランド大学名誉教授)
Dr. Rebecca L. Oxford (University of Maryland, Professor Emerita)
演題: Weaving Peacebuilding into Language Teaching and Learning
(「平和構築と言語教育・学習への融合」)



申込サイト: <https://www.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSf-3jvKX4hD-679647-Fk6566P1PSjF3s-DyeS1TA/viewform>

言語別ラウンドテーブル (Table presentations) (13:00~16:25)

発表者: [日本語発表] 賈愛玲 (国立高雄科技大学)・飯田真紀 (東京都立大学)・酒井優子 (東海大学)・三ツ木真葉 (小樽学院大学)・杉江聡子 (札幌学院大学)・小林由子 (北海道大学)・山田智久 (北海道大学)・片岡志佳 (北海道大学大学院生)・佐藤淳子 (北海道大学大学院生)・千葉佳奈美 (北海道大学大学院生)・山上徹 (北海道大学大学院生)

[英語発表] Yi-Ping Wu (National Kaohsiung University of Science and Technology)・Hui-Hsien Feng (National Kaohsiung University of Science and Technology)・Jia-Ging Ruan (National Changhua University of Education)・Joe Geluso (Nihon University)・Chui Ling Tam (Hokkaido University)・Yasushi Kawai (Hokkaido University)・Te-Yang Liu (National Kaohsiung University of Science and Technology Graduate Student)・Arna Savinykh (Hokkaido University Graduate Student)

指定討論者: 林愷立 (国立台中科技大学)・萬美保 (元香港大学)・佐野愛子 (立命館大学)
今泉智子 (山形大学)・中津川雅宣 (札幌国際大学)・大友理璃子 (北海道大学)

問合せ先: 河合靖 (北海道大学) ykawai@imc.hokudai.ac.jp

主催: 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
科学研究費補助金基盤研究(2) 一般 (課題番号: 19402376) 「多層言語環境における第二言語習得者第一トランスランゲージング志向の会話方略」

プログラム

午前の部 講演 (10:00~12:00)

講師：レベッカ・L・オックスフォード (メリーランド大学名誉教授)

演題：Weaving Peacebuilding into Language Teaching and Learning (平和構築の言語教育・学習への融合)

午後の部 言語別ラウンドテーブル (Table presentations) (13:00~16:25)

	Room 1 (司会：三ツ木真実・杉江聡子)	Room 2 (司会：山田智久・小林由子)	Room 3 (司会：酒井優子・河合靖)
Round 1 13:00~14:45	黄愛玲 (高雄科技大) / 杉江聡子 (札幌国際大)・三ツ木真実 (小樽商大)/佐藤淳子 (北海道大院生) 指定討論者：中津川雅宣 (札幌国際大)	飯田真紀 (東京都立大) /小林由子 (北海道大) /片岡恋惟 (北海道大院生) 指定討論者：今泉智子 (山形大)	Yi-Ping Wu, Hui-Hsien Feng (高雄科技大) & Jia-Cing Ruan (彰化師範大)/Joe Geluso (日本大)/Chui Ling Tam & Yasushi Kawai (北海道大学) 指定討論者：大友瑠璃子 (北海道大)
Round 2 15:00~16:25	Te-Yang Liu & Hui-Hsien Feng (高雄科技大)/Anna Savinykh (北海道大院生) 指定討論者：佐野愛子 (立命館大)	山上徹 (北海道大院生) /山田智久 (北海道大) 指定討論者：萬美保 (元香港大)	酒井優子 (東海大) 千葉佳奈美 (北海道大院生) 指定討論者：林恒立 (台中科技大)

研究代表者・研究分担者の発表要旨

杉江聡子 (札幌国際大学)・三ツ木真実 (小樽商科大学)

題目：「タンデム・ラーニングにおけるトランスランゲージングを考える」

要旨：タンデム・ラーニングは、母語の異なる学習者どうしがペアを作り、使用言語や学習時間を主体的に選択しながら言語を入れ替え、対話を通じて外国語を学ぶ自律学習形態である(河合, 2019)。本研究では、日本語を学習する留学生と英語を学習する日本人学生のタンデム・ラーニングの中で **translanguaging** を行いながら意味交渉 (**negotiation of meaning**) (Varonis & Gass, 1985) をしている場面を対象とし、インタラクションのプロセスを質的に分析する。学習の動画記録から **translanguaging** が発生している場面を抽出してインタラクションの詳細を記述・描画し、学習の促進が期待される部分とそうではない部分を分類する。分析結果に基づき、どのような学習者支援や教授設計上の工夫が **translanguaging** のメリットを最大化するか、あるいは **translanguaging** が適さない教学上の条件とはどのようなものかについて考察する。

飯田真紀 (東京都立大学)

題目：「中国語と日本語の<ジャナイカ>」

要旨：日本語の「ジャナイカ」(及びいくつかバリエーションを含む)という文末表現は「判定詞(だ/である)の否定形+疑問文末助詞」という構成から成る「ではないか」に由来す

る。一方、広東語や北京語といった中国語においても、同様に「判定詞の否定形」と「疑問文末助詞」の組み合わせから成り、日本語の「ジャナイカ」と意味機能的に似た表現がある。そこで、本発表ではこれらの表現を<ジャナイカ>というカバータームで呼ぶ。本発表はまず、広東語では、北京語と異なり、対事的<ジャナイカ>と対人的<ジャナイカ>が区別されており、後者が特に文法化していることを示す。そして、広東語に見られるこの区別が日本語（東京方言・大阪方言）においてどのように反映しているかを言語横断的に検討する。

小林由子（北海道大学）

題目：「多層言語環境としての日本の大学と日本語学習者の「当事者性」

要旨：「当事者研究」は精神医学の分野で当事者である患者が自らを研究するという実践から始まっているが、熊谷（2020）では、当事者研究における当事者に専門家や多数派も含め「すぐに妄想にとらわれてしまう脆弱な存在」としている。上級日本語学習者へのインタビューでは日本の大学における留学生の日本語使用は学習環境などからの影響による学習観・日本語使用感により左右されていることが伺える。本発表では、「多層言語環境」として日本の大学をとらえ、大学における留学生の日本語使用を学習者自身の「当事者性」という観点から検討したい。

Chui Ling Tam and Yasushi Kawai (Hokkaido University)

Title: Classifying translanguaging interactions in YouTube videos and Podcast audio files.

Abstract: The mixed language uses of second language speakers have traditionally been viewed as lack of target language competence. In language contact situations, however, the mixture of two or more languages is a common practice among multilingual speakers. It is highly probable that the multi-layered language environments that result from technological advances in both transportation and information transfer promote mixed language uses to create and to exchange meanings among members of the community. Translanguaging is a recent cover term that refers to the act of communication using plural languages as resources for self-expressions. Sixty-nine instances of translanguaging among Japanese and English bilinguals in seven YouTube videos and eleven Podcast audio files were categorized based on two different classifications: conversational functions and syntactic categories. Conversation functions include interjection, reiteration, message qualification, and expressive function (Gumperz, J. J., 1982; Appel, R., & Muysken, P., 1987), while syntactic categories include nouns, sentence ending particles, particles, dependent clauses, interjections, sentences, tag questions, translations, and adjectives. (Poplack, S., 1980). In this presentation, the results will

also be analyzed in three areas: negotiation of meaning, back-channeling (aizuchi), and sentence final expressions to determine how translanguaging conversation strategies can be developed.

山田智久（北海道大学）

題目：「タンデム学習での使用言語を学習者はどのように決定しているのか」

要旨：本発表は、日本人学習者と留学生の混在クラスである「タンデム学習」において、学習者はどのように使用言語を選択しているのかについて、授業観察をもとに考えるものである。

本発表で扱うタンデム学習クラスは、日本人学生 19 名と日本語を母語としない留学生 19 名で構成されている。このクラスでペアを組み、毎回異なるトピックについて話す活動をオンラインで全 14 回行った。使用言語に関しては、英語の時間 30 分、日本語の時間 30 分、使用言語の決まりなしの時間 30 分と分けた。特に、最後の使用言語の決まりなしの時間は 4 名でグループを作り、自由に話してもらい、この時間を毎回録画して観察した。

観察の結果、使用言語は、グループ内で言語運用能力が低い学習者に合わせて決められる傾向が窺えた。すなわちグループに日本語初級学習者がいる場合は、そのグループは英語で話したり、重要な単語を英語で伝えて確認したりという行為が観察されたということである。

上記のように、教師が使用言語を設定せずとも使用言語が自然と決まる可能性があるという仮説を考慮すると、グループ編成を丁寧に考えることで授業内の活動のある程度方向付けることができるのではないかと考える。

酒井優子（東海大学）

題目：「協働学習型意見交換タスクにおける学習者の使用言語と機能の量的研究」

要旨：高等学校学習指導要領（文部科学省, 2018）は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を挙げ、生徒が課題に対して主体的・協働的に学ぶ協働学習、具体的にはディスカッション等、他者と対話が図られるような言語活動を推奨している。L2 の使用を求める協働学習において学習者が L1 または L2 を使用するときはどのような場面で、どのような機能があり、またどのくらい使用しているのか、学習者同士のやりとりの場面から調査し、実態を把握する必要がある。

本研究は、協働学習として意見交換タスクに取り組むときの日本人英語学習者の日本語(L1)と英語(L2)のトランスランゲージングを観察するものである。4 人一組になって与えられたトピックについて意見交換をするタスクを録画した発話データと stimulated-recall interview の手法を用いたインタビューを基に、社会文化理論に基づく機能に基づきコーディングを行い、タスク中の学習者の L1・L2 それぞれの発話頻度と機能について量的に比較・分析を行った。さらに L2 習熟度の違いにより、言語使用量お

よび機能にどのような違いが見られるかについて量的に比較・分析した結果を発表し、協働学習における L1 の役割について考えたい。

(3) 2021年度

● 国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来 (Past, present, and future of linguistic transformation)」

2022年3月12日、オンラインで開催された。ダニエル・ロング東京都立大学教授の基調講演「小笠原諸島が作り上げた言語」の後、台湾及び国内の研究者による言語別ラウンドテーブル(研究発表)を実施した。発表者は、日本・台湾の他中国、韓国、ロシア出身であった。海外1大学、国内12大学、計13大学から参加があった。

多層言語環境研究
国際シンポジウム(オンライン開催)
(Multi-layered language environment studies international symposium (Online))

言語的変容の過去・現在・未来
(Theme: Past, present, and future of linguistic transformation)

日時: 2022年3月12日(土)(Saturday, March 12, 2022 (Japan time))
10:00~12:00 (Japan time)

講演: ダニエル・ロング(東京都立大学教授)
Lecture: Dr. Daniel Long (Tokyo Metropolitan University, Professor)

論題: 「小笠原諸島が作り上げた言語」(英語講演・同時通訳付き)
Title: A Language Created by the Bonin (Ogasawara) Islands
(in English/simultaneous interpretation)

13:00~16:30 (Japan time)
言語別ラウンドテーブル(日本語・英語)
(Presentations (Japanese/English))

発表者 (Presenters)
・黄曼玲・陳淑慧(国立高雄科技大学)・遊井優子(東海大学)
・植田真紀(東京都立大学)・杉江聡子(札幌国際大学)
・沢谷祐輔(北海道文教大学)・藤田守(拓殖大学北海道短期大学)
・片岡志博・藤 華玲・佐藤淳子(北海道大学大学院)
・Yi-ping Wu・Chi-ju Wu・Yu-Wen Hsu・Bo-Ren Mau・Hu-Hsien Feng (National Kaohsiung University of Science and Technology)
・LIN Chu-Hsi Ivy (Sepporo Gakuin University)・Makoto Mitsuji (Otaru University of Commerce)・Aiko Sano (Ritsumeikan University)
・Tomohisa Yamada (Seinan Gakuin University)・Ruriko Otomo・Yasushi Kawai (Hokkaido University)
・Toru Yamagami・Anna Savinykh (Hokkaido University Graduate School)

指定討論者 (Commentators)
・金沢珠(北海道情報大学)・小林由子(北海道大学)・高美保(元香港大学・北海道大学)・中津川雅宣(札幌国際大学)

申し込みフォーム: <https://forms.gle/BBSeEDK1QigaotvT6>

主催: 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院・国際広報メディア・観光学院
問い合わせ先: 河合 靖 (ykw@imr.hokudai.ac.jp)

科学研究費補助金基盤研究(B) 一般(課題番号:19K11226)「多層言語環境における第二言語習得者→トランスラングエージング者の言語内訳」



プログラム

10:00-12:00 講演「小笠原諸島が作り上げた言語 (A Language Created by the Bonin (Ogasawara) Islands)」(英語講演・同時通訳)

講師：ダニエル・ロング (東京都立大学教授)

13:00～16:30 言語別ラウンドテーブル (日本語・英語)

時間	A(司会:杉江聡子)	B 司会:大友瑠璃子)	C(司会:酒井優子)	D(司会:佐藤愛子)
13:00-13:25	陳玫君 (国立高雄科技大学)	Y-P WU, C-J WU, & Yu-Wen HSUEH (NKUST)	黄愛玲 (国立高雄科技大学)	Toru YAMAGAMI (Hokkaido Univ)
13:30-13:55	片岡恋惟 (北海道大学)	Ruriko OTOMO (Hokkaido Univ)	佐藤淳子 (北海道大学)	Anna SAVINYKH (Hokkaido Univ)
14:00-14:25	杉江聡子 (札幌国際大学)	Presentation Not Scheduled	沢谷佑輔 (北海道文教大学)	Bo-Ren MAU, Hui-Hsien FENG (NKUST)
14:30-14:55	藤田守 (拓殖大学北海道短大)	Makoto MITSUGI (Otaru U of C)	譚 翠玲 (北海道大学)	Aiko SANO (Ritsumeikan Univ),
15:00-15:25	飯田真紀 (東京都立大学)	Ivy, Chuhui LIN (Sapporo G U), Rei KATAOKA (H U)	酒井優子 (東海大学)	Tomohisa YAMADA (Seinan Gakuin Univ), & Yasushi KAWAI (H U)
15:30-16:30	指定討論者 金銀珠 (北海道情報大学)	指定討論者 萬美保 (元香港大学・北海道大学)	指定討論者 小林由子 (北海道大学)	指定討論者 中津川雅宣 (札幌国際大学)

NKUST: National Kaohsiung University of Science and Technology

研究代表者・研究分担者の発表要旨

杉江聡子 (札幌国際大学)

題目：「母語が異なるマルチリンガルの作品共創におけるマルチモーダルコミュニケーションを探る」

要旨：国際化が進む日本の学校教育は、多文化・多言語環境下での協同学習へと移行しており、教授設計の観点からの教育の質の確保を検討する必要がある。異なる言語・文化的背景を持つ学習者が協同学習を行う場合、対話の形態はマルチリンガルコミュニケーションとなる。また、創造的な学びにおいては、コミュニケーションは対話を通じた意味の共同構築となり、「正解」や「理想」のないものに対して、自分たちにとっての意味を生成する行為となる。マルチリンガルコミュニケーションには、言語資源以外のマルチモーダルなコミュニケーションの要素が多様に含まれ、ダイナミックに運用される。複言語話者による協同学習において、どのような学習環境やリソースを提供すれば学習者の対話をサポートできるのだろうか。本研究では、複言語話者が互いに母語以外の言語で対話しながら創造的な学びを行う場合のインタラクションの実態を明らかにすることを目的とする。対象者は、日本語学習者としてのベトナム人学生1名と中国人学生2

名である。ベトナム人学生がフィールドワークの成果をまとめた動画作品に対して、中国人学生が改善意見を提示する場面を録画し、ELAN を用いた質的分析を行った。マルチモーダルなコミュニケーション要素を分析することで、対話を通じた意味の共同構築の上で、どのような困難や不成立があるか明らかにし、それを補完するための教授設計上の工夫を検討したい。

飯田真紀（東京都立大学）

題目：「広東語の談話標識“唔知呢 M4zi1ne1”と日本語の応答表現「さあ(ね)」

要旨：広東語の“唔知呢 M4zi1ne1”は、丁寧度の違いを除けば日本語の応答表現「さあ(ね)」(独立して用いられる場合)に似た談話機能を果たす。見かけ上は“唔知”(知らない)に文末助詞“呢”(～かな、だろうか)が付いた結合であるが、主語である“我”「私」を加えることができない、文末助詞“呢”が“唔知”に対する伝達態度を表していないなど、他の文末助詞を用いた結合(例“唔知+呀 aa3”, “唔知+喎 wo3”)とは異なる振る舞いを見せるため、応答の談話標識として既に一語化した結合だと見なせる。

本発表は“唔知呢”が談話標識へと文法化されたメカニズムを日本語ほか言語横断的な文法化の知見を交えつつ論じる。また、“唔知呢”が“唔知”「知らない」というフレーズを構成要素に含むにもかかわらず、単に事実を知っているか知らないかという質問には答えることができず、日本語の応答表現「さあ(ね)」と似て、疑問への答えがわからないという状況でのみ適格になる点、答えをはぐらかす時に用いられ得るといった点を持つことを指摘する。

Ruriko OTOMO (Hokkaido University)

Title: Discourse of “Easy Japanese”: An update

Abstract: This paper focuses on a series of academic dialogues and debates revolved around the recent Yasashii Nihongo (literally “Easy or Considerate Japanese”) movement. Taking the perspective of language policy and planning, academic publications on Yasashii Nihongo have been understood not only as a display of policy provision envisioned/presented by Japanese language educators and academics but also as an active platform where language policy is crafted, interpreted and even appropriated. This presentation will provide an update on this on-going research by including analysis on one of the seminal books on Yasashii Nihongo. In discussion, I also aim to draw a link between the present Yasashii Nihongo movement and some of the historical narratives with regards to similar movements in 1980s.

Makoto MITSUGI (Otaru University of Commerce)

Title: The role of personal learning context in L2 motivation: Focusing on the emergence of new values and beliefs

Abstract: The motivation of L2 learners changes over time and is also influenced by a wide variety of factors. When we look at the motivational change of individual learners, they never go through the same motivational change process even if they have similar learning experiences. In this case, it is necessary to investigate motivation as a process within the learning context in which an individual learner is placed. Therefore, this study microscopically analyzes dynamic motivational changes over time through a qualitative approach while emphasizing an individual L2 learner's learning context. It clarifies the mechanisms or factors that give rise to L2 motivation from social and psychological aspects, primarily focusing on the generation of new beliefs and values.

酒井優子（東海大学）

題目：「意見交換タスクに見られる scaffolding と言語使用のあり方」

要約：高等学校学習指導要領（文部科学省, 2018）は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を挙げ、生徒が課題に対して主体的・協働的に学ぶ協働学習、具体的にはディスカッション等、他者と対話が図られるような言語活動を推奨している。学習者同士の協働学習では、学習者がまだ十分に使えない英語（L2）がコミュニケーションの手段となるため、習得途上の L2 のみの言語形式を用いて、伝えたい意味内容を相手とやり取りするのは困難さを伴う。本研究は、協働学習として意見交換タスクに取り組むときの協働的対話における日本人英語学習者の日本語（L1）と英語（L2）のトランス・ランゲージングを観察し、L2 習熟度の異なる学習者が、どのような scaffolding のストラテジーを用いて、相互行為を構成しているのかを調査する。認知的発達、他者と関わる社会的な相互行為の中で行われると捉える社会文化理論の視点から、第二言語学習者がその場その場で利用可能なリソースを駆使しながらコミュニケーションを達成していく相互行為を描写し、学習者の柔軟な言語使用がどのような支援に役立っているのか分析する。

Aiko SANO (Ritsumeikan University),

Tomohisa YAMADA (Seinan Gakuin University),

and Yasushi KAWAI (Hokkaido University)

Title: Translanguaging in L2 teaching: Identity and mediation

Abstract: Invisible purposes of L2 education reveal themselves when language instructors struggle with their identities. Native speakers tend to teach their languages to convey their authentic language and culture. Typically, Japanese education for JSL students in Japan focuses on developing the learner's proficiency in Japanese, and in effect tries to assimilate them into Japanese society. Non-native teachers, on the other hand, have limitations as a native speaker model. The purpose of English education in Japan, for example, is to breed Japanese citizens who can

speak English in addition to Japanese. This presentation proposes an ideal translingual self as a goal of L2 education, instead of an ideal L2 self. Three L2 teaching practices will be reported: translanguaging debate, online tandem class and translingual literature reading. The translingual self has yet to be defined; however, two concepts will be included. One features a communicator in a multicultural society using their language repertoires as resources. The other features a mediator among different communities in a global society. Lastly, the significance of developing mediating competence in L2 education will be discussed.

● 多層言語環境研究 講演会

題目：手話の変種と歴史的変遷

日時：2022年3月26日（土）10:00-12:00

場所：北海道大学メディア・コミュニケーション研究院（ハイブリッド開催）

講師：神田和幸氏（国立民族学博物館・外来研究員，NPO 手話技能検定協会理事長）

要旨：手話は使用者で大別して、ろう者手話、難聴者手話、聴者手話の3つの変種がある。テレビなどで見る手話は手話通訳であろうから、多くは音声言語を同時通訳する聴者手話タイプである。ろう者手話は福祉現場で見られるが、難聴者手話を見る機会は極めて稀である。手話にも方言があり、地域方言の他に、男女変種、世代変種もあり実態は一般に想像されているよりも変種も多く使用状況も複雑である。手話は発達段階により、家庭手話、学校手話、地域手話、全国共通手話に分類できる。歴史的にもこの発達順序とほぼパラレルな変遷を遂げてきた。特殊な事例では離島において未就学ろう者の存在が確認されているが、独自の語彙使用があり、現在では高齢者のみであるから、調査はほとんど進んでいない。しかし日本手話の原型ともいえる語彙使用が見られる。手話使用者は対面相手により変種を使い分けるが、中には音声言語と併用する者もあり、その混淆状態はかなり複雑になっている。

（４）２０２２年度

● 2022年度国際学術大会「地域文化の理解と日本学研究ネットワーク形成」—地域文化と多層言語環境研究—

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院、基盤研究(B)「多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略」グループ、漢陽大学大学院日本語文化学科 BK21FOUR「地域文化の創出と人文活動方法論を構築するための日本学教育研究チーム」の3者の共催で、韓国漢陽大学と北海道大学のジョイントの国際シンポジウムを実施した。行事全体は、2023年1月27日から29日の3日間であったが、本科研グループの共催は1日目の1月27日、北海道大学遠友学舎（ハイブリッド開催）に実施した。北海道大学から7名、漢陽大学から6名の計13名が発表した。

(5) 2023年度

● 多層言語環境研究科研—研究打合せ会

2023年7月22日13:20～16:40に、旧永山邸（札幌市旧永山武四郎邸及び札幌市旧三菱鉱業寮）和室A（札幌市中央区北2条東6丁目）で、11月開催予定の研究成果報告を目的とした国際シンポジウムにおける発表論文について、1人15分で経過報告を行った。

● 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会における Communication と Mediation」

2023年11月4日5日、北海道大学クラーク会館で開催された。主催は北海道大学メディア・コミュニケーション研究院で、本科研と、科研費基盤(B) (20H01290) が共催した。黄愛玲氏（台湾・高雄科技大学）と葛西洋三氏（台湾・静宜大学）の招待発表を皮切りに、台湾及び国内の研究者による英語と日本語の研究発表及びパネルディスカッションが行われた。発表者の出身国は、日本と台湾のほか、中国、韓国、ロシアであった。海外2大学、国内13大学、計15大学からの参加があった。

2023年度多層言語環境研究シンポジウム

多層言語環境社会における Communication と Mediation

日程：2023年11月4・5日
場所：北海道大学クラーク会館
大集会室2

招待発表：黄愛玲（台湾・高雄科技大学）
葛西洋三（台湾・静宜大学）

パネルディスカッション「グループワーク」英語授業—やる気が伝わる学習活動のデザイン—
コーディネーター：藤村友希（明治大学）
パネリスト：三ツ木真実（小樽商科大学）、吉村悠生（龍谷大学）、柳村亮（立命館大学）、
田中真希（大阪公立大学）

研究発表：
飯田真紀（東京聖立大学）、李麗（北海道商科大学）、大友瑠璃子（北海道大学）、奥真明子（明治大学大学院生）、樫村祐志（明治大学大学院生）、片岡悠佳（北海道大学大学院生）、亀本俊亮（明治大学大学院生）、河合靖（北海道大学）、金銀珠（北海道情報大学）、小林由子（北海道大学）、酒井優子（東海大学）、佐藤淳子（北海道大学大学院生）、佐野愛子（立命館大学）、アンナ＝サヴィヌイフ（北海道大学研究員）、新海書（北海道大学大学院生）、杉江聡子（札幌国際大学）、鈴木洋海（明治大学大学院生）、羅翠玲（北海道大学大学院生）、寺尾和真（明治大学大学院生）、中津川雅直（札幌国際大学）、中村権奈子（明治大学大学院生）、傅媛媛（北海道大学大学院生）、藤田守（拓殖大学北海道短期大学）、三ツ木真実（小樽商科大学）、村山友里枝（北海道大学）、山上徹（札幌新陽高校）、渡辺幸倫（札幌女子大学）

主催：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
共催：科研費基盤(B)「多層言語環境における第二言語習得—トランスランゲージング志向の会話方略」(19H01276) 研究グループ・科研費基盤(B)「英語学習における『やる気』メカニズムの解明」(20H01290) 研究グループ

問合せ先：河合靖（北海道大学）ykawai@imc.hokudai.ac.jp

プログラム

11月4日(土)

	部	時間	Room A	Room B
午前	招待発表	9:00-9:30	黄愛玲・国立高雄科技大学	
	司会：河合	9:30-10:00	葛西洋三・静宜大学	
	休憩	10:00-10:10		
	個人発表 司会： A) 大友 B) 佐野	10:10-10:40	大友瑠璃子・北海道大学	中村姫奈子・明治大学(院生)
		10:40-11:10	奥貫明子・明治大学(院生)	中津川雅宣・札幌国際大学
11:10-11:40		李鳳・北海商科大学	譚翠玲・北海道大学(院生)	
11:40-12:10		佐野愛子・立命館大学		
	昼食休憩	12:10-13:30		
午後	個人発表 司会： A) 飯田 B) 酒井	13:30-14:00	飯田真紀・東京都立大学	
		14:00-14:30	藤田守・拓殖大学北海道短大	傅媛媛・北海道大学(院生)
		14:30-15:00	村山友里枝・北海道大学	鈴木洋海・明治大学(院生)
		15:00-15:30	金銀珠・北海道情報大学	酒井優子・東海大学
	休憩	15:30-15:50		
	パネルディスカッション	15:50-17:20	『グループワーク×英語授業—やる気が伝染する学習活動のデザイン』 コーディネーター：廣森 友人(明治大学) パネリスト：桐村 亮(立命館大学)・吉村 征洋(龍谷大学)・田中 美津子(大阪公立大学)・三ツ木 真実(小樽商科大学)	

懇親会(17:45-19:00)

11月5日(日)

	部	時間	Room A	Room B
午前	個人発表 司会： A) 河合 B) 萬	9:00-9:30	河合靖・北海道大学	寺尾和真・明治大学(院生)
		9:30-10:00	亀本俊亮・明治大学(院生)	佐藤淳子・北海道大学(院生)
		10:00-10:30	サヴィヌィフ・アンナ・北海道大学(院生)	
	休憩	10:30-10:40		
	個人発表 司会： A) 小林 B) 三ツ木	10:40-11:10	小林由子・北海道大学	渡辺幸倫・相模女子大学
11:10-11:40		檜村祐志・明治大学(院生)	新海茜・北海道大学(院生)	
11:40-12:10		片岡恋惟・譚翠玲・北海道大学(院生)	三ツ木真実・小樽商科大学	

研究代表者・研究分担者の発表要旨

大友瑠璃子（北海道大学）

題目：多層言語環境における言語簡略化：簡約日本語を通して見えてくること

要旨：本稿は、多層言語環境で立案・実施される言語政策としての言語簡略化に焦点を当てる。ここ15年ほど間に日本では、「やさしい日本語」に代表される言語簡略化が、多言語話者に対応する言語政策として各所で進められている。本稿は、この「やさしい日本語」ではなく、1990年代に当時の国立国語研究所所長の野元菊雄により考案された日本語体系・日本語学習の方略である「簡約日本語」を取り上げる。新聞や学術雑誌の語彙から成るコーパスを利用して、語彙を2000語に制限したり、学習の対象とする文法項目は活用形に準じて整理したりするなど、当時としては先駆的な試みであったものの、2023年現在、簡約日本語のかつての功績や研究成果は表立っては見ることはほとんどない。

本稿は、この“失敗”の原因はコーパス計画ではなく、Lo Bianco (2004, 2005)の提唱する「ディスコース計画」にあったのではないかという仮説をもとに、簡約日本語の“失敗”を捉え直す試みである。簡約日本語を形作った学術論文15点からコーパスを作成し、コンピューターベースの批判的談話分析の手法で、キーワードを抽出したり、高頻度の言語使用のパターンを明らかにしたりする。また、言語政策の類型を援用してこれらのパターンを整理し、簡約日本語を取り巻くディスコース—たとえば、その背景や理念や価値観—を考察することで、社会的に実装されるためにはどのようなディスコース必要であったのか、そして、簡約日本語はどうしてそれらを醸成することができなかつたかを推察する。

佐野愛子（立命館大学）

題目：トランスリンガル・アイデンティティ・テキスト [実践報告]

要旨：CLD（文化的・言語的に多様な）子どもたちの「ことばの教育」では、子どもたちのもつ多様な言語資源の豊かさ、素晴らしさを子どもたち自身に気づいてもらう取り組みが重要となる。そうした取り組みのひとつとして、García



ら (2017) は複数の言語を自在に活用して書く作家の作品 (=トランスリンガルな文学; 佐野 2023) を読みながら、作家の言語選択について考察する教育実践を紹介している。ただ、日本国内でそうした教育実践を行おうとした場合、日本語学習者である CLD の児童生徒に読める程度の易しさと書かれ、かつ、生徒たちの多様な母語を反映したトランスリンガルな文学作品を見つけるのは極めて困難である。そこで本実践では、Cummins (2011) で提案された Identity Text と呼ばれる活動を参考に、子どもたち自身に自らのアイデンティティに関わる作品を書いてもらうことを目指す。日本を代表するトランスリンガル文学作家・温又柔氏の協力を得て、様々な国につながる大学生・社会人に自らの言語資源を最大限に投影した作品を書いてもらい、今後の教育実践において作品例として児童生徒に読んでもらうテキストとする予定である。当日の発表では、ワークショップの参加者の作品とともに、その実践に対する参加者の声を紹介したい。

飯田真紀（東京都立大学）

題名：言文不一致言語の外国語教育～日本の
広東語学習者を例に～

要旨：中英二言語を公用語とする香港が多層
言語社会であることは言を俟たない。ただし、
英語の能力は知識層に偏在している。一方で、
ほとんどの人の母語である中国語も、口頭言
語（「話す、聞く」言葉）と書記言語（「読む、
書く」言葉）があたかも2つの別言語のように体系的に異なっており、平均的な香港人は
著しい言文不一致状態にある。これは、口頭言語で広東語を用いる一方、書記言語では北
京語の語彙・文法を基盤とした書面中国語を規範に用いるためである。



こうした香港の中国語環境の特殊さは、広東語を外国語として学ぶ学習者にも厄介な問題をもたらす。本発表では、香港や海外の学習者が直面する問題を概観した後、日本の学習者に固有の問題を指摘し、解決策を模索する。

酒井優子（東海大学）

題目：意思決定タスクにおける協働的対話の特徴

要旨：日本の英語教育では、近年、話すこと、特にやり取りのある言語活動が求められている。教師による知識伝達型の受動的な学びから、学習者が「話すこと」を含んだ言語活動に向けて、学習者が課題に対して主体的・協働的に学ぶ協働学習、具体的には、ディスカッション等、他者と対話が図られるような言語活動が推奨されている。本研究では、小グループで意思決定タスクに取り組むときの日本人英語学習者の協働的対話を観察し、タスクの遂行のためにどのような相互行為を構成しているかを調査する。学習者はどのように目標言語である英語と母語である日本語を用いてタスクに取り組むのか、学習者の日本語と英語のトランスランゲージングを観察し、日本語と英語が併用される場合はどのような場合で、相互行為の構築にどのように関わっているのかを考察する。また、その場その場で利用可能なリソースを駆使しながらコミュニケーションを円滑に進める彼らの柔軟な言語使用の観察をもとに、社会文化的アプローチによる第二言語学習者の捉え方について述べる。

河合靖（北海道大学）

題目：多層言語環境社会への適応ートランスランゲージング場面に対する日本人英語学習者の態度

要旨：輸送手段および情報通信技術の発達とともに人と情報の移動が増大し、世界中で多層言語環境が生じてきている。これに合わせて、言語環境ならびに話者人口ともにモノリンガルからバイリンガルへ移行し、そこでの言語使用として、言語間を行き来するトランスランゲージングが増えると予想される。一般的にモノリンガルの言語観では、場の言語種に応じた言語選択が好まれ、求められると考えられるが、二言語ともに熟達度が高いバイリンガルどうしの会話の場合、一つの言語種に偏らず言語間を行き来する発話が多く観察される。熟達度の高いバイリンガルが増えればこのような言語使用が増え、それに伴い

こうした言語選択に対するそれ以外の人たちの評価も変更されることが予想される。本研究では、二言語の熟達度の高い話者どうしの会話の言語選択を考察して分類し、それぞれの分類の言語使用について作成された模擬会話に対する日本人英語学習者の反応を見ることによって、現在の日本でのトランスランゲージ的言語使用に対する評価の傾向を見る。調査では、両言語の熟達度の高いバイリンガルの会話で観察された10分類のうち、7分類について模擬会話例を作成し、日本人英語学習者に理解、違和感、反感について5件法で回答を得た。あわせて、外国人との接触機会、自分の英語使用に対する自信、言語選択に関するビリーフについても調査した。

小林由子（北海道大学）

題目：国際共修授業における日本語母語話者の日本語使用意識

要旨：本発表では、留学生と学部正規学生の国際共修科目「考え方の技術」における日本語母語話者の日本語使用意識について、インタビューにより検討することを目的とする。

授業は日本語で行われるが、受講者の半数は日本語レベルが中級以上の非日本語母語話者である。

一方、学部正規学生は、留学生が含まれることもあるが、大多数が日本語母語話者である。授業における学習活動の中心は日本語母語話者と非日本語母語話者が混在する3～4名のグループワークで、日本語母語話者は、非日本語母語話者を意識しながら母語である日本語を使うことになる。

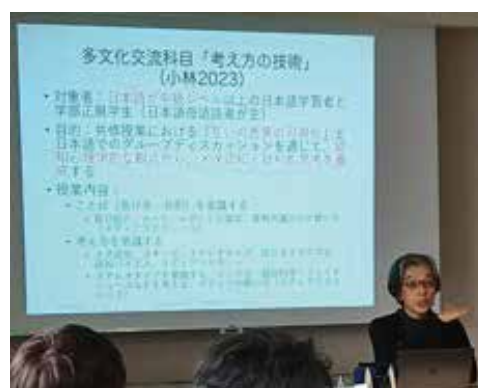
「考え方の技術」は批判的思考の養成を目的としている。そのため、トピックは具体的であるものの抽象的な事柄について話さなければならず、日本語母語話者は、中級日本語学習者が理解できるように日本語を調整しなければならない。そこで、日本語を母語とする受講者7名に対し、非日本語母語話者と日本語でグループワークを行う際の困難は何か、何を意識しどのような配慮や調整を行っているかについて半構造化インタビューを行った。

その結果、日本語母語話者は、非日本語母語話者とのグループワークにおいて、コミュニケーションに困難を感じることもあり、その際に様々な配慮や調整を行っていることが明らかになった。認識される困難や配慮・調整には個人差が見られた。また、認識される困難や配慮・調整には、それぞれの日本語母語話者の言語観や外国語使用経験など複数の要因が反映されていることが示唆された。

三ツ木真実（小樽商科大学）

題目：多層言語環境における学びと学習者の認識：トランスランゲージングと認識の変容に着目して

要旨：本研究では、日本人大学生とポーランド人大学生との間で行われたオンライン国際共修授業に参加した日本人大学生3名を対象に、授業を通じて得られた認識やその変化について調査した。授業では、異なる言語を母語とする学生たちが、それぞれの言語リソースを自由に使用して、自分の意見やアイデアを表現する形で協働でプロジェクト（日本の



発明品に改良を加え、ポーランド市場で売り出すための新デザインを協働で考案し最終回でプレゼンテーション)に取り組んだ。多層言語環境での学びとトランスランゲージングが埋め込まれた国際共修から学習者は何を学び、またどのような変化を自己認識するのかを考察することが本研究の目的である。国際共修授業の事前と事後を振り返る形で個人別態度構造分析 (PAC 分析) (内藤, 2002) を実施した。また、それぞれの分析結果を踏まえて3名で相互にディスカッションをしてもらい、認識の変容についてどのような共通点と相違点が見られるかを整理してもらった。結果として、学習者は「言語リソースを増やすことへの意識の高まり」、「トランスランゲージングに対する態度の深まり」、「言語不安の減少」を変容として認識していたことがわかった。また、変容した意識の共通点として、新しいトランスランゲージングの価値観 (トランスランゲージングに対する抵抗感の緩和) を得ていたことも明らかとなった。

